

連載講座

第41回

江戸を武家政権の首都に ・松平信綱と保科正之（二）

作家 童門冬二

将軍家光の人事方針

俗に`振袖火事`と呼ばれる江戸の大火災が起きたのは、明暦三（一六五七）年一月のことである。将軍は、三代目の徳川家光だった。家光は元和九（一六二三）年に将軍職に就いたが、この頃はまだ、関ヶ原の合戦が終わってから二十三年目、豊臣家が大坂で滅びてから八年ほどしか経っていなかった。徳川家の家臣団も、いわゆる戦中・戦前派と戦後派とが入り混じり、徳川幕府の制度もまだ固まっていなかった。幕府の基礎的制度を整備したのは、家光である。家光には、子どもの時から勉強相手や遊び相手がいた。後にこの連中は全て老中になる。伝えによれば、家光を実子のように可愛がった大奥の春日局が旗本の中から選んだ優秀な子弟たちだったという。松平信綱・阿部忠秋・堀田正盛などが中でも傑出していた。この連中は全て家光が将軍になった後老中に登用された。しかし堀田正盛は、任地である川越（埼玉県）で大火を出し、信州松本に転勤させられた。阿部忠秋は、途中で老中を辞めている。残ったのは松平信綱一人だった。そして、家光が凶らずも発見した自分の弟が保科正之である。松平信綱は、寛永五（一六二八）年から寛文十二（一六七二）年まで老中を務める。保科正之も慶安四（一六五一）年から寛文九（一六六九）年まで大老扱いを受けた。家光は慶安四（一六五一）

年四月に、死ぬから、後を継いだ四代家綱が延宝八（一六八〇）年五月までその職にあった。信綱は実に四十四年の在職期間を持ち、保科正之は十九年の在職期間を持つ。家綱もまた延宝八（一六八〇）年まで足掛け三十年の将軍の座に就いていた。したがって信綱も正之も家光・家綱の二代に亘って、その政治の補佐をしたと言っている。明暦の大火の復興担当時は、老中は酒井忠清と松平信綱たちであり、大老として土井利勝や酒井忠勝がいた。保科正之は、

「ポストはいりません」

と固辞したが、実際には大老として扱われていた。土井や酒井は家光から、

「体の具合がいい日だけ江戸城に来ればよい」

と、遠回しに退職を求められていたから、二人は敏感にそれを察した。だから江戸城には来たり来なかったりする。結局は、明暦の大火の後始末は、松平信綱と保科正之の二人が、中心になって進まざるを得なかったのである。

本格的な江戸の都市計画

今でいう災害対策本部を組んだ時に、まず議題に上ったのが、この連載の1回目にも書いたが、「焼け落ちた江戸城の天守閣をどうするか」ということであった。古手は、

「何ととっても、将軍家のシンボルなのだから、早急に復元する必要がある」

と言った。保科正之が松平信綱の顔を見た。

「松平殿の意見は？」と訊いた。信綱は臆せず、「再建は見合わせましょう」と応じた。再建論者の老中たちは色を成した。

「江戸城の天守閣を、松平殿は復元しないと言われるのか？」と、毗（まなじり）を決した。しかし信綱はクールだ。静かに応じた。

「天守閣の再建は、しばらく見合わせましょう。それよりも、早急に被災者の救済が必要です。応分の経費が必要です。とりあえず、天守閣の再建費をそちらに回しては如何でしょうか」

理が通っているので、再建論者も怒りをこらえて沈黙した。しかし目は信綱を睨みつけている。保科正之が割って入った。

「わたしは松平殿の意見に賛成する。被災者の救済が先でしょうな」。だれもが保科正之が前将軍家光の実弟だということを知っているから、それぞれ沈黙した。怒りも次第に収まって来る。結局は、再建論を唱えた老中たちも、正之の一言で再建を諦めた。今度は信綱が提案した。

「上様（将軍）の御居所である本丸の再建は急がなければなりません。しかし、この際今後のことを考えて、江戸城がどんな火災にも耐えられるような堅牢なものにしたいと存じます。ついては、思い切って、城内に居宅を構えている大名たちを、城外へ出したいと思いますが如何でしょうか？」

みんなびっくりした。とんでもないことを言い出す奴だというような表情をしたが、しかし考えてみると信綱の言うことも筋が通っている。いろいろなコネで江戸城内に居宅を構えているのだろうが、本来は別にその大名たちが江戸城内にいないでもいい。城外に居ても立派に用は果たせる。信綱のいうのは、

「江戸城は徳川将軍の居宅を兼ねているので、この際そうでない施設はすべて城外へ移らせよう」

ということであった。正之が訊いた。

「興味ある案だが、御三家はどうするのだ？ 例外とするのか」

御三家というのは、徳川家康の九男・十男・十一男が初めの当主になった、尾張・紀伊・水戸の三家である。家康の血筋なので、何の違和感もなく江戸城内に邸宅を構えている。しかし信綱は、

「御三家も城外へ出ていただきます」と言った。天守閣再建案を唱えた老中たちも呆れて信綱を凝視した。しかし、その眼には驚嘆と感嘆の色があった。

（この男は、本気で江戸城の改革をやるつもりだ）と、信綱の気迫を感じ取ったからである。現在皇居内の一隅（北の丸）に、かつて天守閣があった址を示す石の土台だけが保存されている。この時の火災で焼けたためだろう、土台は赤茶けている。信綱にすれば、

「まず、江戸城から（というのは将軍から）模範を示さなければ、思い切った江戸の町の復興はできない」

と考えていた。実をいえば、信綱は大火を起こして責任を取らされた盟友の堀田正盛の後を受けて川越城主になった。そして、焼けた川越の復興策を考え、実施した。現在の川越市内には、信綱が展開した復興計画の址がいくつも残っている。町筋の、白壁塗の古い蔵や、新しい建築方式を施した建物が混在している。新旧の移り変わりが一目でわかるので、川越には観光客も多い。将来の火災に備えて、信綱は埼玉県内に、野火止の用水¹を掘削した。江戸初期とはいえ、信綱はかなり、

「愛民の思想に燃えた政治家」

の一人だと言っていいだろう。前号に書いた、「民は由（よ）らしむべし」の政治理念を自ら行っていたのである。